RI 第２６１０地区

東となみロータリークラブ会報

2012-2013 年度　No.１３

事務局　〒939-1635　富山県南砺市福光 7336-4 福光会館３F

ふくみつ光房内　TEL　0763-53-1333ＦＡＸ0763-53-1334、

inashorc@athena.ocn.ne.jp

2012-2013 年度　会長　河合耕一　、幹事　上田昭二

2012-2013 年度 RI テーマ

「奉仕を通じて　平和を」

（田中作次会長）

〜〜〜

例　会　記　録

第１６３９回例会

平成２４年９月２６日(水)　井波文化センター

１．点　鐘　会長

２．ソング：それでこそロータリー

３．ゲスト：山本成子(せいこ)さん(高岡市美術館学芸課課長補佐)

白い萩と姫リンゴ

４．会長の時間：本日は山本成子さん、ようこそ。後程、卓話をよろしく。お土産に高岡市美術館の招待券を有難うございます。企画展の「モリエンナーレ」チラシの写真は一目で、誰を真似たかわかります。話題がすくなって、今月の「花」を持ってきました。一つは「白い萩」で、これは赤い萩の突然変異から生まれたもので、もっと大きな花にもなります。もう一つはご存じ、「姫リンゴ」で、色合いは普通のリンゴで、香りも同じですが、味は酸っぱくて食べられません。もっぱら鑑賞用、盆栽用です。さて、秋には砺波市もそうでしょうが、南砺市は、市議会選挙があり大変です。当クラブにも、関係者がおられますが・・・。どんなことがあれ、このロータリーの瞬間が息抜きです。

５．幹事報告:①地区大会前日指導者育成セミナー参加並びに地区大会・懇親会の最終確認は今週中。(熊本県知事の講演あり)②今月のロータリーレートは、１＄＝80 円③例会後、理事会あり。④各クラブ例会変更は事務局に確認。

６．委員会報告：①親睦活動委員会（上田幹事代理）：10月 31 日秋の家族旅行は岐阜、美濃市「すぎ嶋」秘湯会のメンバーで、A 案は、うだつのの美濃和紙をつかった灯りアートの町並み探検。B 案は、紅葉の飛騨せせらぎ街道のドライブ。天候をみたり、希望を聞いて決定。また、31 日が都合悪い会員もおられるが、予定は前から決まっていたので、前後するか検討します。②出席委員会：本日 20 名中 13 名出席（65.00%）

７．ニコニコＢＯＸ(SAA：本日 5 名 6000 円、9 月度計 40000 円、年度累計 132000 円)

高瀬会員：お彼岸に咲く彼岸花が今年はまだ咲いていません。残暑の厳しさを物語っています。所用のため早退します。

助田会員：早退させていただきます。

荒木会員：尖閣諸島がもめています。無人の島ならば世界共通の遺産にすれば、どうだろう？

山本会員：所用で早退します。ゲストの山本成子様、最後まで卓話を聞けず、申し訳ありません。

中島会員：高岡市美術館の山本様ようこそ。卓話よろしくお願いします。

卓話「彫刻家村上炳人について」

山本成子さん(高岡市美術館学芸課　課長補佐)

横山幹会員(紹介者)：山本成子様は、横浜出身で、東京芸大美術学部芸術学科卒業、昭和 62 年より平成 2 年まで、箱根の「彫刻の森美術館」の学芸員、平成 6 年英国レスター大学博物館学科より修士号を取得、平成 6 年より現在まで、高岡市美術館の学芸員として活躍中です。本日は館長の村上隆様の父上の村上炳人さんの彫刻作品や経歴を解説して頂きます。

山本さん：　井波は木彫で有名な所ですが、高岡は金属で有名、共に工芸に携わる方が多く、作家を沢山輩出している富山県内でも素晴らしい地域です。井波の彫刻を高岡で鋳造するなどつながりがあります。さて、昨年初めて、金属の町の高岡市美術館で初めて木彫の展覧会を開きました。広島と愛知と 3 か所で開催する形で財団「地域総合整備財団―ふるさと財団―」から補助金をもらい開催しました。木彫作品というのは、梱包から運搬、展示まで大変な労力、マンパワーが必要です。展覧会の補助金がほとんどが日通さんに渡りました。高岡市美術館がリニューアルオープンした時は、展覧会に 1000 万円の補助が出たものでした。今はそんなことはあり得ません。

さて、館長の村上隆(りゅう)は京大工学部卒、材料学を専攻、国立文化財研修所に勤務し、三角神獣鏡などの古代の金属鋳造の研究をされていました。現在、京都国立博物館の学芸部長を兼務しています。阪神大震災や東日本大震災の文化財レスキューのリーダーシップをとり、災害から文化財のレスキュー・保護に力を入れています。

HP より

(スライドを使いながら)館長の父、村上炳人(へいじん：上記写真)は大正 5 年生まれで、平成 9 年に当美術館で展覧会を開催しましたが、その年に 81 歳で亡くなりました。高岡市出身で、高岡工芸学校木彫科を出ました。家は真宗の寺で三男で、本名は丙(あきら)といいました。当時の高岡工芸学校は、東京、金沢に次ぐ優秀な工芸技術学校で、木彫科、金工科、漆芸科があり、井波から大島さんが指導されていました。高村光雲の弟子の平櫛田中(ひらくし・でんちゅう：数え 108 歳で死去、日展の指導者)の内弟子になりました。東京美術学校校長の岡倉天心にその能力を認められました。村上炳人は、昭和 12 年～15

年と昭和 18 年～終戦まで、2 度の兵役につき、戦地に向かう途中で運搬船が撃沈され、一昼夜漂流し、九死に一生を得る経歴をもちます。20 歳代の成長時代に悲惨にも戦争の荒波にほんろうされたのです。復員後、京都に住居を構え奈良や京都の古文化財に学びつつひたすら彫刻家としての道を模索し、法隆寺金堂焼失による復元事業に参加したり、仏師として大阪・四天王寺金堂内の本尊、救世観世音菩薩像を制作したりする傍ら、毎年院展彫刻部へ具象作品を出展し続けました。しかし日本の美術界は抽象的傾向が流入し、激しく変化していたため、彫刻の分野も同様でありました。当時一方で抽象的表現にひかれていた炳人は、「献水」の出品を最後に院展を退会、昭和 34 年（１９５９）には二紀会(長谷川総一郎氏が所属)に転じました。昭和 36 年には院展の彫刻部は解散しました。わだかまりの所為か、炳人は院展時代の作品は殆ど廃棄したそうです。作風は概ね三期に分類する事が出来ますが、第一期の抽象時代で代表的な作品としては「生」、第二期は具象への回帰を示しており、「宝像国の休日」そして作者の充実期でもある本領が発揮された第三期の代表的作品は「紅」・「卑弥呼」・「ワタシハピエロ」等で、中でも注目されるナースの着彩像「赤い手帳」は、凛然としたその形態に古仏像とも通低するような素純な美しさが有り、胸元のペンに現代の息吹がみなぎっています。そして「何故」の絶彫に至って炳人は、お孫さんの交通事故の経験も重ね、人間の生と死に深い思いを寄せていたことを、この作品に刻印して終わっています。

平成 9 年の展覧会のテーマは「日本の心を刻む造形への執念」と、本人が決めて開催しました。その後、炳人の作品が 72 点高岡市美術館に寄贈され、散在しなくて関係者はほっといたしました。又、村上隆館長がいるうちに、炳人の作品展が開催できると思っています。本日、配らせていただいたチラシは、森村泰昌氏の「モリエンナーレまねぶ美術史」の作品展の紹介です。森村氏は自分で例えばマリリンモンローのメイキャップをして、写真をとって作品にするなど、変わった美術家です。21 世紀の多様化の時代にいろんな形の美術表現があることを紹介する方です。是非、ご覧ください。また、横山一夢(2 代)先生や長谷川総一郎先生の展覧会も企画したいと考えています。本日持参した印刷物「明治の彫塑―彫像　対　木彫という観点から」は、美術館ニュースに掲載しようとまとめたものです。ご覧になって講評頂ければ幸いです。御清聴有難うございました。

初期作品

具象

抽象

具象へ回帰

スライドから、添付(古いカメラのため)画像悪し。